

二三の薬劑による「バンクロフト」仔虫

昼間末梢血内誘出

(予 報)

長崎大学風土病研究所臨床部 (指導: 兼任所員 北村精一教授)

片峰大助・田村祐治・森口義春

「バンクロフト」仔虫にはその特異なる生物學的性質として夜間のみ末梢血中に現はれる定期出現性があるが、その原因が奈邊にあるか未だ謎につままれた興味ある問題である。又この定期出現性が一般臨床家にとって「フィラリア」症の診断特に無症状感染者の検出を困難ならしめて居ることは否定出来ない。従来も診断の目的を以て便宜上晝間仔虫を検出せんとする試みが行はれて來た。特にアンチモン劑例へばアンチモナル (明石)、ステブナル (北條)、アンチモンコロイド・A・M・C. (福田) 等の薬劑の注射により或る程度の成功が收められてゐるが検出率は必ずしも 100%ではなく、又注射と云ふ比較的繁雜な操作、検査に要する時間等から日常實用化されてゐない様である。之等薬劑による仔虫の晝間末梢血内出現が夜間のそれと同一機序に依るものか否か疑問であるが仔虫の定期出現性を考へる上に興味ある現象と云はなければならぬ。

我々は「バンクロフト」仔虫の定期出現性に關する研究の一部として諸種薬劑が仔虫の末梢血内出現に及ぼす影響を觀察してゐるがその中特に興味があり診断上にも價值あると思はれる 2, 3 の薬劑 (スパトニン、ゾルスチボサン、コンムニン) を用ひた成績を取敢へず豫報の形にて報告す。

實驗の方法は先づ豫備検査として仔虫陽性患者に就き 24 時間に亘り 1~2 時間毎に連続耳朶採血、ギムザ染色にて血液 60mm³ 中の仔虫を算定し仔虫陰性又は僅少數陽性の晝間

時即ち正午 (12時) を期して本検査を行つた。

本検査としては「スパトニン」0.1g 内服、ゾルスチボサン 3.0cc 筋注、「コンムニン」1.0cc 皮下注を行ひ、夫々について直前、2 分半、5 分、10 分、15 分、30 分、1 時間、2 時間、3 時間、4—5 時間、及び 24 時間目に採血同様仔虫を算定した。尙本成績は昭和 26 年 12 月—27 年 1 月に行つた成績である。

1) 「スパトニン」: 夜間仔虫陽性患者 12 名に「スパトニン」0.1g を内服せしめることにより全例、仔虫少數のものも例外なく晝間仔虫検出が可能であつた。「スパトニン」服用後直ちに仔虫の出現が起り 2 分半、5 分と急激にその數を増して 5 分で最高値を示しその後漸時減少して大部分 4—5 時間の後迄に殆んど消失する。尙出現する仔虫數も多く中には夜間の仔虫數に匹敵し或は之を凌駕するものさへもある。夜間仔虫陰性の 2 名は本法に依るも仔虫發見出来なかつた。(第 1 表、第 1 圖)

2) 「ゾルスチボサン」: 2 例中 1 例は殆んど不變であつたが他の 1 例は 10 分目に最高 7 隻の出現を見たが、誘出法としての價値はあまりない。

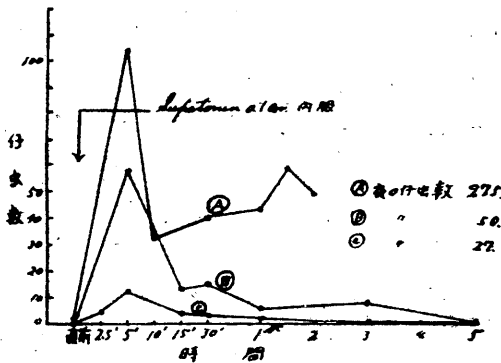
3) 「コンムニン」: 夜間 156 隻を証明する一例は「コンムニン」の皮注により直前の 3 より「スパトニン」と同様の曲線を以て急激に出現 5 分後最高値 55 隻を示し、3 時間後舊値に復した。唯 1 例で目下症例追加中であるが「スパトニン」同様著明な誘出作用が認められるがその誘出機序が「スパトニン」と

第 1 表

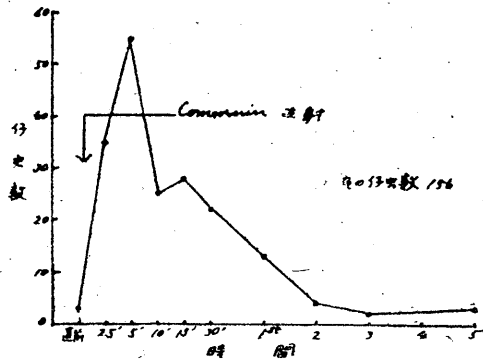
時間 例	前夜	直前	2.5	5	10	15	30	1st	2st	3st	5st	24st
1	275	2		104	32		40	43	49			1
2	50	0		58		13	15	6	8	1	0	0
3	475	0	97	125	99	84	60	113	79	65		
4	27	0	5	12	3	4	3	2	0	0	0	0
5	8	0	0	1	2	2	3	6	2	0	0	0
6	26	0		4	3	4	0	0	0			0
7	62	0		12	7	4	1	1	0			0
8	8	0		1	0	1	0	0	0			0
9	2	0		1	1	1	0	0	0			0
10	140	0		105	95	96	40	20	17			0
11	1	0		2	1	1	0	0	0			0
12	12	0		3	2	4	1	1	0			0
13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

晝間 Supatonin 0.1Gr. 内服 数字は仔虫数

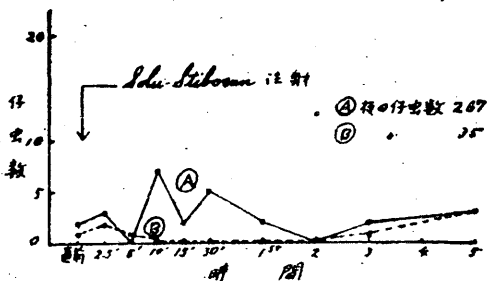
第 1 圖



第 3 圖



第 2 圖



同一のものか否か目下全く不明である。

我々の行った「スパトニン」0.1g内服に依る仔虫晝間末梢血内誘出法は操作が簡便でその検出率は100%と云つてよくしかも5分と云ふ短時間内に多数の仔虫を誘致出来る點從來にその比を見ない優秀な晝間検出法として推奨出来ると信じてゐる。

在來仔虫の晝間誘出方法として好んで仔虫に對し殺虫的効果のある藥劑が用ひられ又誘

出現象はその薬剤の仔虫に対する効果の証左とされて来た様である。前述の「コンムニン」に依り仔虫が晝間末梢血内に誘致されると云ふ現象は如何に解譯すべきか甚だ興味ある問

題であり今後「バンクロフト」仔虫の定期出現性究明の上に貴重な一示唆となるものと信じ鋭意研究中である。

詳細は相次いで発表の豫定である。

拙筆に当り熱心な御指導を賜り御校閲の勞をとられた北村教授に深謝す。

参 考 文 献

- 1) 福田千代太：臨床と研究 21(12)944、(昭 17)
- 2) 宮川 米次：臨床人体寄生虫病学(昭16)
- 3) 岡田 侃三：皮膚科紀要 39、(5)375、(昭 19)
- 4) 鶴見三三、武田光磨：東京医事新誌 64、531(昭15)

(昭 27. 3. 7 受付)